

# 巻 頭 言

## 技術者に必要なこと

常務執行役員 佐藤 浩至  
Hiroshi Satou

ChatGPTに「技術者とは何か」と問うと、「科学や工学、技術的な知識や経験、スキルを使って、実際の問題を解決したり、製品・システム・サービスを設計・開発・改良する人」と返ってきました。この定義に照らせば、常に改善を心がけるいすゞの従業員は、まさに全員が技術者と呼べるのではないのでしょうか。私たちは日々、社会の基盤を支える商用車という製品に真摯に向き合い、より安全で、より効率的で、そして持続可能な未来の実現に向けて、技術を磨き続けています。



最近、タウンホールミーティングなどで「技術者に必要なことは何ですか？」という質問を受けることがあります。私がいつも答えるのは、「好奇心」「観察力」「想像力」の三つです。

好奇心は、技術者の原動力です。目の前の現象や新しい技術に対して「なぜ?」「どうして?」と問いかける姿勢が、技術の進歩を生み出します。日常の中にある小さな違和感や疑問を見逃さず、それを深掘りすることで、新しい発見につながります。

観察力は、現象やデータを注意深く見つめ、科学や工学の知識をもってその本質を理解する力です。現場で得られるデータ、ユーザーの声、試験結果など、あらゆる情報を的確に捉え、分析することで、課題の本質が見えてきます。

想像力は、得られた知見をもとに、未来を描く力です。技術が社会や人々の生活にどのような影響を与えるのかを考え、より良い方向へ導くためのアイデアを生み出すことが求められます。

そして最近、私はこの三つに加えて「勇気」が必要だと強く感じています。新しい価値を創造するためには、時に現状を否定し、未知の領域に踏み出す必要があります。その過程では、周囲の反対や不安に直面することもあるでしょう。しかし、それを乗り越える勇気こそが、技術者としての成長を促し、新しい道を切り開く原動力となります。

私自身は、入社以来 30 年近くにわたり、耐久信頼性という商用車にとって重要な性能を担当してきました。商用車は、長距離・長時間の運行に耐え、過酷な使用環境でも安定した性能を発揮することが求められます。そのため、車両の構造や部品の強度、振動、摩耗、疲労など、あらゆる要素に対して高い信頼性が重要です。私はこの分野で、材料力学、機械力学、物理学、振動工学、統計学、信頼性工学など、ハードウェア中心の知識と技術を深く掘り下げ、実践の中で多くの知見を積み重ねてきました。

しかし、技術の世界は常に進化しています。近年では、自動運転という全く新しい領域に挑戦する機会を得ました。これは、従来のハードウェア中心の分野とは大きく異なり、ソフトウェア、AI(人工知能: Artificial Intelligence)、センサ技術、データ解析など、まさに次世代の技術が求められる分野です。これまでの知見だけでは太刀打ちできず、ゼロから学び直す覚悟が必要でした。

この新しい分野に挑む中で、改めて「好奇心」「観察力」「想像力」、そして「勇気」の重要性を痛感しています。未知の技術に対して興味を持ち、積極的に学びに向かう好奇心。新しい現象やデータを冷静に見つめ、そこから本質を見抜く観察力。そして、それらをもとに未来の車両や社会の姿を描く想像力。これらがそろって初めて、技術者として次の一步を踏み出すことができます。

更に、これまでの常識や慣習を乗り越える「勇気」も不可欠です。自動運転の世界では、従来の開発手法や基準を根本から見直す必要がある場面もあります。新しい価値を創造するためには、時に現状を否定し、反対意見を乗り越えて進む覚悟が求められます。

いすゞの IX<sup>※</sup>で掲げる安心と斬新を両立させることは、簡単なことではありません。技術的な挑戦だけでなく、社会的な受容性や倫理的な課題にも向き合う必要があります。それでも、私はこの挑戦に大きなやりがいを感じています。自動運転が実現することで、交通事故の削減、物流の効率化、ドライバー不足の解消、人の移動支援など、社会に大きな恩恵をもたらす可能性があるからです。

これからも、好奇心を持って新しい技術に向き合い、観察力で本質を見抜き、想像力で未来を描き、勇気を持って一步を踏み出す。そんな技術者であり続けたいと思います。

いすゞには、技術者が挑戦し続ける文化があります。現場の声を大切にし、実際の使用環境に根ざした開発を行う姿勢。失敗を恐れず、挑戦を歓迎する風土。これらは、いすゞの技術力の源泉であり、私たちが世界に誇れる企業文化です。

私たちは、その可能性を最大限に引き出し、未来を切り開く役割を担っています。ワクワクする気持ちを忘れずに、これからも新しい価値を創造していきます。

※ IX (中期経営計画「ISUZU Transformation-Growth to 2030(IX)」)